BLIZZARD ENTERTAINMENT

OVERWATCH

我らの未来



JOSHI ZHANG 著

ストーリー
JOSHI ZHANG

イラスト
LESLY OH

シニア・ディレクター、ストーリー&フランチャイズ デベロップメント
VENECIA DURAN

シニア・マネージャー、ライティング&ブックス
MATTHEW COHAN

エディトリアル・スーパーバイザー
CHLOE FRABONI

エディター
SHANNON WATTERS

シニア・ブランド・アーティスト
SOPHIE ERB

シニア・プロデューサー
BRIANNE MESSINA

プロダクション
TAKAYUKI SHIMBO, QIANNAN ZHANG

ゲーム・チーム・コンサルタント
JEFF CHAMBERLAIN, MIRANDA MOYER,
NESSKAIN, JUSTIN RICHMOND, DION ROGERS, JUDE STACEY

日本語翻訳
GEORGE INAGAKI

Blizzard.com
© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。
Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のものです。実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。
Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。

我らの未来

先頃、ローマの一件以来――すなわちドゥームフィストがヴェンデッタから玉座を奪い返してより初めて、我々タロンの幹部会議が開かれた。その愉快なる顛末を、永劫の時の中で我が身の無聊を慰める一助とすべく、こうして筆を執った次第である。

まずもって出席者の少なさが、これまでのヴェンデッタの体制がいかに砂上の楼閣であったかを如実に物語っている。優柔不断なるバウンティ・ハンターも、葛藤に苦しむサイボーグもいない。西部の盗賊も、七光りの大富豪も……現実から逃げ続けているオムニックも、ゴミ山の女王もだ。小心者の金融人を抜きにすれば、あの女剣闘士の三日天下を受け入れていた者は、二つの心臓を持つ道化師に……醜い腕の遺伝子学者のみ。

二人の“裏切り者”を快く思わないのは、優雅なる暗殺者、死神、影の密偵といった、アカンデに忠実な者たちだ。言うまでもなく、その場には一触即発の空気が流れていた。実に良い、実に刺激的ではないか。

そうして会議は始まり、アカンデは全員に参会の礼を述べた……しかしその社交辞令では、臆病なるマクシミリアンの震えを止めるには至らなかったようだ。咎めの言葉一つない状況に罪悪感を抑えきれなくなった彼は、用意された席にそのまま座ることを許されるのか否か、“新たな”主に伺いを立てた。アカンデの答えは当然「イエス」……それどころか感謝していると告げた。彼らの“裏切り”のおかげで、以前よりも前に進めたのだと。そしてそれがなければ、今日ここに皆で集まる未来もなかっただろうと。

アカンデに促され、その“前進”、かつてウォッチポイント・グリムスヴォトンと呼ばれたこの場所における成果について、私自ら説明をしてやった。





「この牢獄はヘリックス・セキュリティ社によって管理されていた。国際規模の武装組織であるヘリックスの守備隊を制圧するのは容易ではない……今回の襲撃、私の加勢によって一気に形勢が逆転したのは君たちも知っての通りだ。いつか必ず必要になる時が来ると信じ、私はドローンたちを施設内に長年待機させていた。無論、ヘリックスとて傍観していたわけではない。これを排除しようと、何度も何度も挑んでは返り討ちに――」

するとそこで、不躾にもリーパーが私の言葉を遮った。「一人芝居はよそでやれ。簡潔に報告しろ」とのことだが、私は無視して続けた。

「この牢獄で、我々囚人は――罪とされた行為の信奉者たちは、俗世から隔離されていた。世界の変化、進歩、開花を望んだがゆえに幽閉され、理想を追う自由を奪われていたのだ。しかし今、彼らは再び熱意を胸に世界へと羽ばたいていった……いずれ星の巡り合わせによっては、我々の力となることもあるだろう」

そこでまた口を挟む者がいた――ソンブラだ。「ここには凶悪犯の中でも最悪な連中が収監されていたのよ。それを、取引もせずに解き放ったですって？」などと、私が正気を失ったかのように難癖をつけてくる。

そしてめでたく、会議の場は阿鼻叫喚の巷と化した。醜き遺伝子学者が偽善を嗤い、さらには被験体シグマの話を持ち出すと、かの老人に妙にこだわる小娘、今は関係ないだろうとエサを取られたカラスの如く食ってかかる。そこにリーパーとウィドウメイカーが便乗し、それぞれ腹に抱えていたとみえる不平不満をぶつけ始めた。「薬」がもたらす害について責め立てる彼らに対し、モイラは自分が手を貸さなければより“残念”な結末が待っていただけだと一蹴する。喧しい部屋の中、私は交わされている言葉の刃が物理的なそれに変じはしまいかと思案しつつ傍観していたのだが、ふとマウガと目が合い、互いに笑みを交わし合った。どうやら見かけほど愚かな男ではないとみえ、彼もまた私と同じくこの場を楽しんでいるようだった。

「静まれ！」と、アカンデが一喝したことで静寂が訪れる。彼の権力が絶対のものであることが明確になった瞬間だった。続いてアカンデは、この場にいる全員が、それぞれの困難を乗り越えて前進し続ける義務を負っているとし……それに応えられない弱者はタロンに必要ないと宣言した。

再びマクシミリアンが質問の声を上げた。誰もが抱いていた疑問……ヴェンデッタはどうなったのか？　我々タロンはグリムスヴォトンに拠点を移した。では、玉座を失った敗残者は今どこにいるのか？

アカンデによれば、ヴェンデッタは国連とオーバーウォッチの監視下に置かれて

いるという。その答えでは臆病者の不安を取り除くには足らず、彼らではあの女を長く抑えておくことはできないと懸念を露わにするマクシミリアンに対し、アカンデは即座に肯定した。オオカミが再び牙を剥くのは間違いない……しかし、その未来を歓迎すると言ってのけたのだ。

皆の耳に遠吠えが届いたわけではあるまいが、先ほどまでの剣呑な空気は消えていた……あるいは、敵意を向ける相手が変わっただけか。その後、近々再び会合の場を設けることが決まり、今回は閉幕となった。各々が深遠なるグリムスヴォトンの暗がりへと消えていく中、我々は一つの共通する思いを胸に抱いていたはずだ。すなわち――

新たな時代を迎えたタロンにおいて、あらゆる挫折、あらゆる困難を自らの糧とし、我々が世界を変えるのだ。遠い未来、この記録を読み返す時、この日抱いた理想が我が胸に輝き続けていることを願う。



